柳沢家駒込屋敷（六義館・六義園）跡　第４地点（東京都文京区）

大成エンジニアリング株式会社　宇井義典（士－163）

はじめに

本遺跡は東京都文京区本駒込に位置する国指定特別名勝六義園に隣接する区立六義公園運動場の一角に相当し、柳沢吉保の下屋敷があった場所である。所在地は、本駒込六丁目16番10号で、区立六義公園運動場の管理棟改築工事に伴い事前調査を実施した。

当該地一帯は、元禄８（1695）年に５代将軍徳川綱吉の側用人であり、後に老中格の座についた柳沢吉保が拝領した。柳沢家の拝領地となる以前には、越前国加賀藩前田家（中屋敷）、出羽国山形藩鳥居家（下屋敷）がそれぞれ拝領していた時期がある。屋敷地の東は中山道に面し、北には伊勢国安濃津藩藤堂家、西には越前国加賀藩前田家等の大名屋敷が接する環境であった。翌元禄９（1696）年には玉川上水から引き込み江戸市中に給水した千川上水が当該地付近に敷設された。

当調査区の北側に広がる六義園は、柳沢吉保が７年の歳月をかけた回遊式築山泉水庭園である。今でも当時の姿を彷彿とさせ、庭園を訪れる人々を今でも魅了している。

第１図　第３面遺構分布図

調査の概要

調査範囲は長方形を呈する240㎡を測り、地表面の標高は24m前後である。遺構確認面は３面確認された。確認面は最上面から第１面と付し、各面の年代と遺構は次の通りに分類した。

・第１面　19世紀中葉
　植栽痕２基、土坑１基、小穴１基、計４基
・第２面　19世紀前葉から中葉
　上水跡１基、道跡３基、植栽痕１基、切土２基、小穴１基、計８基
・第３面　17世紀末葉から18世紀後葉（第１図）
　堀１基、上水跡４基、植栽痕３基、切土２基、小穴１基、計11基

当該地は屋敷地における南西隅に位置するため遺構数は多くはないが、各画期での土地改変が非常に大きいように映る。最も古い第３面では自然堆積層であるローム層を削平した様子が確認され、屋敷地の外郭として廻る大規模な堀などが構築された。第２面の段階になると半分ほど埋まっていた堀は人為的に埋め戻され、埋め戻された堀を含む大きな範囲で切土が行われた。第１面の段階では切土が埋められ、更に全体的に盛土による嵩上げ

写真１　堀（020号）完掘状況（北東から）

写真２　堀（020号）西側断面（北東から）

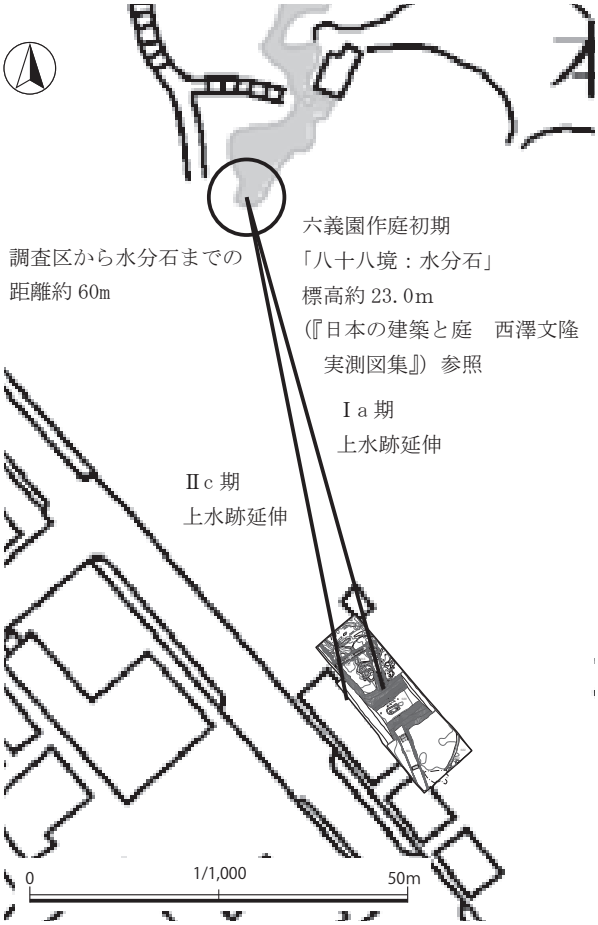
が行われた。このように屋敷地の中心から離れた箇所でも土地改変が確認されたのである。次に第３面の調査成果に絞ってみていきたい。

第３面の調査成果

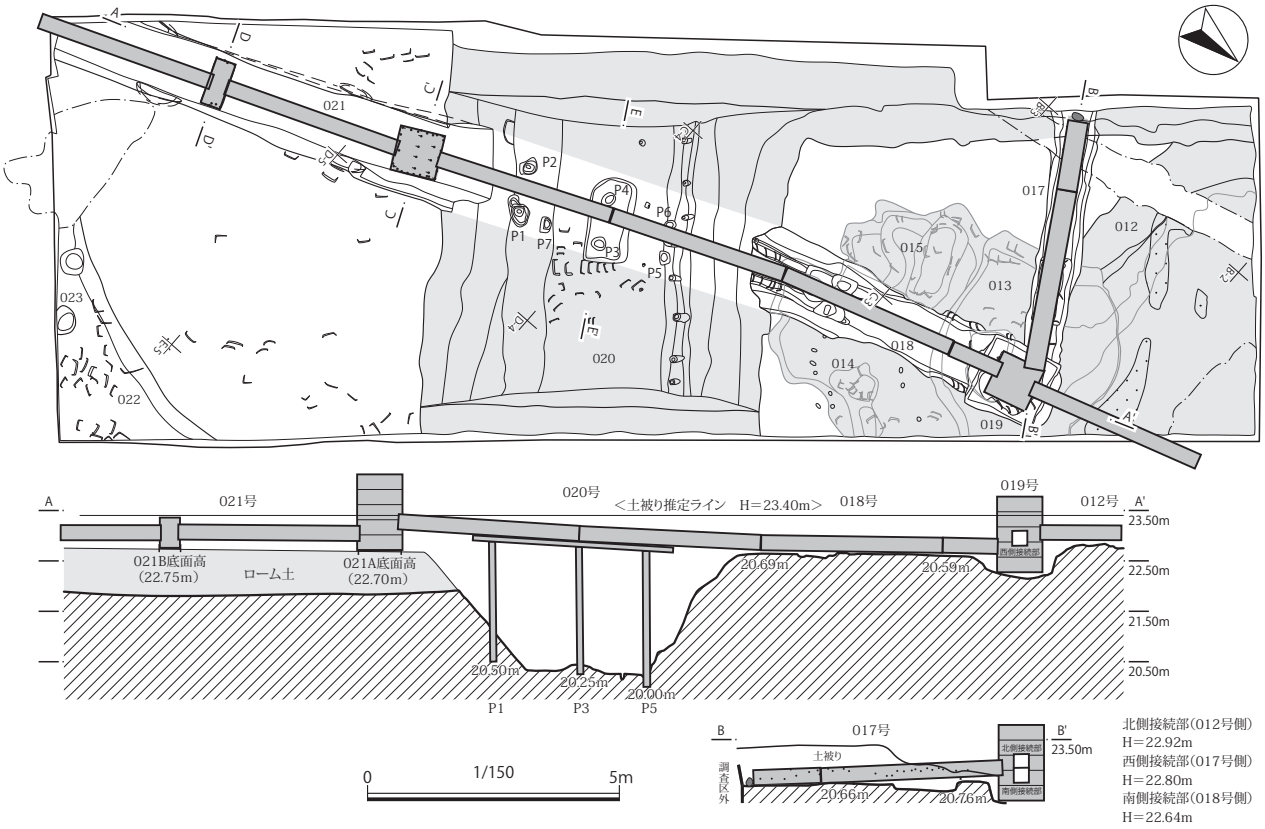
土地利用の変遷などを把握することができたが、特に第３面の堀（020号）（写真１・２）と上水跡（017～019・021号）が確認されたことは重要なことと指摘できよう。堀は六義園を描いた絵図面にも描かれており、大形である。上端巾は約７ｍで底面までの深度は３ｍ前後を測り、堀が屈曲する箇所が確認された。両壁の仰角は50～55°を測る。底面には顕著な工具痕があり、堀浚いが行われた可能性がある。

上述のとおり、この堀を掛け渡す上水跡が確認された。これを裏付けるように、堀の底面には上水樋を支えたと考えられる２列の柱穴列も確認された。今回の調査では、木樋等の材そのものは腐植していたが、その規模は釘や腐植の跡から捉えられたため上水網を復元することができた（第３図）。なお、この復元作業に際し、練馬区立石神井公園ふるさと文化館所蔵の『千川家文書』などが大変有益であったことを付言したい。

上水跡は第３面と第２面で確認され、第２図で示すように上水跡を延伸させた先は、六義園の八十八景の一つで大泉水の給水口となる水分石に至る。つまり、今回の調査で確認された上水跡は庭園の大泉水へ給水していた可能性が示されたのである。



第２図　発掘調査検出上水跡の推定給水口



第３図　第３面上水跡遺構構築材復元図

第1～3図、写真1・2　文京区教育委員会所蔵